

## 北海道開拓の初期に於ける外人の工作 (下)

牧野信之助

### 三、開拓使當局への反對意見と外商の受負運動

開拓顧問ケプロンの歸國以後に於ける當局の方針は、大體に於て遺されたる豫定計畫の踏襲續行にあつたと云ひ得るかも知れないが、然し、前述の如く、富源の開發を**目指す**こと餘りに急に、當面の計畫を忽せにし、又内部黨閥私利の情弊が覆ふべからざるに至つて、當局に對する不信認表示は決してこの拓計の成功を有利に導くことにはならなかつた。十四年拓計終局の際開拓使拂下事件の勃發が、天下の視聽を聚めて、一大汚點を附せらるゝに至つたそれには、背後の蕩々たる民論が、藩閥打倒を目的とせることが本旨であつたやうなことには相違ないにしても、然し、開拓使官吏の腐敗と黨閥との露骨なる行動が天下の指彈を買つた一事に至つても、決して消磨せられざる事實が存在せることを否定すべきでない。

開拓使當局に對する不信任は、ケプロンの言明するところにも、多分にその意志表示を認められる。拓計の頭取兼顧問としてのケプロンは、職務に恪勤忠實無比と云ふべきであつた丈に、當然當

局より表示せらるべき、豫算の内容につき、在職の最後迄、一の談合を受くるものなきを不快とし、斯かる爲體にあつては事業の遂行に責任を有する能はずと宣言してゐる。殊に六年第二次の札幌滞在中、黒田長官宛の書信には、當局官吏の腐敗を難じ、「固封せる書籍」の如く拓計資金を示さざること責め、事務の實際は、冗員と冗費とに滿され、一箇の木挽場一區の漁獵場に至る迄皆然らざるなしとして、情弊の纏綿せるを指摘し、改革斷行を迫まつてゐるものがあつた。

斯の如き觀察に於ける官吏にして私利を貪るもの、眼に餘つた行動は、同年のヤツハン・テレー・ヘラルドの投書に、炭田開坑に關して「地中の實を喰ふ士官と稱する虫の巢となるのみ」と酷評せられたものにも、強ち否定し得ざる弱點を打消することが出来ない。而して、黒田長官の傘下に聚まれる薩閩の眼に餘る專斷行爲については、更らに衆庶の視聽を惹き、彼の一面論客としてのライマンの如き亦この問題を捕へて、開拓使の莫大なる資金が、私かに結托せる政商への貸附金として流用せられつゝあるとの風説を擧げて指彈し、黨閥と商人との不正關係を諷示せるものがある。ライマンは、嘗て根室北見沿岸等の巡歴に際し、恰も大名の如き觀ある *Lesso* が、専ら漁權を掌握して威勢を振へるを目撃し、彼等と當局間との結托をも察知した如くであつた。<sup>①</sup>

斯る拓計の重要位置にある外人技師によつて抉剔された、開拓使内部の暗黒面が、延て全體の事業に如何なる影響を及ぼしたかは、云ふ迄もないことであるが、その批難は、更らに頭目黒田長官、及

び顧問ケブロンをも渦中に投じて批議するものが續出するに至つたのは、是亦避けらるべきではなかつた。勿論それには、黒田長官に對する汎き政治的反感も挾雜して、屢、其の當時の國際的に有力なる新聞紙を通じて攻撃の目的となつた。而して其等の中代表的と目せらるゝものは、七年四月の日新眞事誌に掲載せられたる、横濱ガゼット新聞よりの轉載に係る三十ヶ條の拓計に對する批難文であらう。その要點とするところ、開拓事業開始以來、既に國帑六百萬圓を消耗して、矚目すべき效なきを責め兵備不治、移民不振、農商頓挫の現状に及び、遂に北海道の首都としての札幌の位置の頗る不適當なるを諷刺してゐるのである。今、此等の論點を逐條論議に及ぶならば、それは餘りにも感情論に趨せ過ぎた嫌があり、開拓使當局をして、反つて悠揚たる態度を以て、辯駁を興へしむる結果となつた。即ち一々反證を挙げ統計の示すところにより、拓殖の進歩を示し、開拓の二十年基礎をなし、二十年奏功し、三十年大成すべく、速功を求めずとして、首都としての札幌の位置はもとより不動確乎たるを言明し、外人技師の施工驚歎に値するものあるを歴示してゐるのである。然し、相次いで同誌に登載された開拓使不信認の投書は、辛辣前者の比でなく、其等の細條中、開拓使は、常に當面の責任を免れんが爲めに、問題あれば直ちにその罪を顧問ケブロンに歸せんとするを遺憾とすと云へるものは、強ち無根の毒舌として看過すべきではなかつたかも知れぬ。之に對して、當局は、ケブロン之事業はすべて開拓使公刊するところの公文録に示せりと辯駁せるも、恐らくそれは、當面の遁辭に過ぎ

なかつたであらう。

この投書事件は更らに第三者として、論客ライマンの批評するところとなつた。彼は右投書の署名者「松前」若しくは「目附」と稱する反對論者を目して、事政治上に關するもの多きより推論し、外國公使館の關係者より出でたるべしとなし、日本の新事業に對して、債權者の立場にある外人は、開拓使の勤儉冗費如何を知らんとするにあるを以て、宜しく歳出入費の明細を公表して、人心の疑惑を去るを要すとしてゐる。而して、ライマンの見るところによれば、本使の資金費途は正當なるべきも、事業の進捗は、世人の眼に觸るゝもの多からざるべしとなし、自ら推測するところを擧げて、新設道路建築等に關する支出一百萬圓、移民及びその補助費五十萬圓程度なるべく、既に支出せられたる總額數百萬圓に比して、一小部分に止れりとなし、他の多くは恐らく、政商並びに漁場受負人への貸出に費されたるならんことを強く暗示してゐる。而して、右貸附金を借用せる政商等の占得權利の絶大なるを述べ、當局の反省を促してゐるが、恐らくこの諷示は、楯の半面に於て比較的公平なる審判であつたかも知れない。但し、一面この種貸附金が如何に運用されたかは別として、元來の使命が、發達の途上にある産業保護への重要な大賚であつたことを忘れてはならぬ。

最後に、デブロンの劃策そのものについての反對表示がある。勿論、開拓使に於て、その劃策に關

する以上、絶對的の權限を把持したる彼にとつて批難の言を聞くことは、あり勝ちの事とも考へられる。その一例として、彼の列座した、七年一月在日本東洋廣益議會 (Asiatic Society of Japan.) の席上、甲比丹ブリツヂホルトの、石狩河及札幌府を論題とする講演に於て、札幌大道を以て相通する札幌の位置を難じて、建都の目的を知るに苦しむとなし、一の車輛を有せざる官吏街を、幅員三十尺乃至四十五尺の大道にて連結するよりも、寧ろ萬民の爲め多くの小道を開くに如かずと論じ、衆庶冤嘆を鳴らすの日正に近からんと結言してゐるものがある。勿論それは、學術論の埒外に出でたる、感情に趨せたるものとすべきであるが、恐らくケプロンの策慮に對する、反對表示以外のものではなかつたであらう。

然るに、亦一面、開拓使を遶る外人政商間に於ても、ケプロンへの反對が可なり濃厚に示されつゝあつた事實がある。但し、彼の位置と人格の高潔とは、遂に彼への肉薄と陥穽とを擅にする能はずして、漸く彼の歸國以後に至つて、その鋒鏖を示しつゝ躍動したのである。それは聯邦の一請負商人バチェルダ (Gr. M. Bachelder) と稱するもので、維新當初より、蝦夷地に出入し、開拓草創の際に乗じて、船舶軍器等を賣込み各種建築の請負を業としてゐたのであつたが、今や、ケプロンの歸國と共に、直ちに開拓使に出入し、拓計の將來に對して長文の意見書を提出し、抱負の實現に及んでゐるものがある。彼の獻言は、八年五月及十二月の二回に互つてゐるが、その最初のものには、冒頭北海道

開發の論策について多くの抱負あるを述べ、而も、ケブロン在任中はその權限を冒さんことを恐れて控扼したりしも、今やその機會を得たることを述べ、後説と相對して暗にケブロンの施設を排し、徐ろに自説の開陳に及んでゐる。即ち、先づ第一に石狩の炭礦を開いて石狩河と札幌・繪鞆(室蘭)を鐵道にて連結するを要すべく、爲に十隻の帆裝船を建造して、繪鞆(室蘭)より石炭材木等を支那・桑港の市場に輸出すべしとなし、右諸工事は請負に依托することによりて不廉なる人件費を省くべしとして、暗にケブロンブロックの工作を不利益の條件なりと諷示してゐるのである。バチエルダーは、右意見書に石狩平原を中心とせる殖民區劃圖を同封し、該區劃の賣却によりて移民は激來し、政府は莫大なる收入を得べく、又鐵道の建設によりて、地方の開發と貨物の輸出が如何に有利に導かるゝやを論證し、從來開拓使の設計が兎角大なる誤謬を冒せるを縷言して、こゝにも暗に老顧問を批難してゐる。而して、最後に移民局の設置を奨め、世界各地より移民を招致すべしとして、當局に迎合煽動の言辭を弄してゐる。

更に、第二回目の獻言にありては、その要旨は結局前文と異なるなきも、更らに一大長編を綴つて或は北海道に包括せらるゝ各地種に互れる面積を擧げ、農牧の適地を推算し、之に對比して聯邦の一區カリホルニア州に於ける産業の發達を細敘し、これ全く鐵道及び道路開通の必然的影響なるを歴證し、以て北海道の將來を期待せしめ、又、英國に於ける製鐵業の盛況を示して、北海道にありても、

奥州南部の鐵鑛を齎して、道産石炭を使用し、大に該工業の發達を期すべきを勸告せるものがある。斯る、世界諸邦に於ける富源開發と、致富の概勢をこの新開地に例示して、その有望なる前途を打開せしむることに於て、何よりも黒田長官の功利心を煽り、結局、斯業の權威測量師オンサンク氏に請負はしむるものあらば、斯る富源開發の原動力となるべき石狩・札幌・室蘭を連鎖する鐵道の建造は、僅々六朱の公債にて二ケ年に竣功すべしと結言に及んでゐる。②。但し、この請負運動は、その動機に於て不純なるものあるを洞察せしめ、流石に明敏なる黒田長官を動かすに至らず、又、直接彼を引見して、その意見聴取をも避けしめ、開拓使としては、鐵道建設、殖民地區劃賣與二つとも容認するに至らなかつた。然し之を公平なる見地よりして一の開拓促進策として考察する時は、財政の許す限り當時實現せざるべからざるものであつた。この點に於てはバチエルダーの主張するところはケブロン亦同一案を抱懷してゐたので、唯この政商は、受負によつて巨利を博せんとし、その爲めにケブロン等の如き高俸者の必要なきを非難したとすべきである。

① ケブロン報文所收逸利來曼北海道記事(根室ヨリ宗谷及函館通り東京迄)の條

② 一八七五(明治八年)十二月九日在東京デ、エム、パツテヨルドル北海道開拓の議につき建言

#### 四、札幌農學校教師團を中心とする開拓工作と採鑛土木施工の進捗

私は、以上節を重ねて、ケブロン歸國の歲明治八年前後を一齣として、開拓使に於ける外人工作の

委曲を展望した積りである。勿論、この間に於て、當局としては開拓根本方針の進展に關してこそケブロンブロックの畫策に委任したものの、それとは別系統に於て、猶多くの手段によつて、拓殖工作のなされつゝあつたことは云ふ迄もない。例へば、札幌及び、その他の都市に近く、國防的の意味から漸次設置さるゝやうに計畫された屯田の如き、その目的に即して擴張して行つたのであるが、一面拓殖の先鋒として無人の曠野を開發すべき針路をとり、着々奏功してゐたのである。

それにしても、前述の如く、朝野環視の下に、十年拓計の成績を翹望せられつゝある開拓使にとつては、此際單なるケブロン遺策の拾收に苦しみ、更に更新せる第二段の工作に進展せんとする必要を見た。それには、第一、當初より引續いて在勤中の技師を加へ、別に首腦者を迎へて札幌に一大農業教育機關としての學校を設備し、學校中心の開拓經營を必要とし、第二に、引續いて既定方針となれる富源開發の爲めに、大に採鑛土木の施工に及ばんとし、著明の技術者を備聘して掉尾の活躍を示さんとするに至つたのである。

想ふに、黒田長官は、藩閥の驕兒として廟堂に列し、赫々たる威權を以て北海道の開拓に當り、然も、始終その熱意を失はなかつたと云ふ點に於て、政治家として他に多くの缺點を有したかも知れないに係はらず、依然として偉大なる存在であつたと稱してよい。而して、この世運の大勢を見る



の敏も、決して人後に墮ちなかつた所以は、既に言及した如くである。殊に彼は、開拓の頭首として當初より拓殖教育の徹底を期し、早く男女の留學生を海外に送り、東京に假學校を設置し、高遠なる理想の下に、獨特の教育觀を保持して、絶えず注意を怠らなかつたのであつたが、今や機熟するを見て、宿望を果さん爲、幾多の曲折を経て、遂に九年八月に於ける、札幌農學校の開設を實現せしめたのである。勿論それには、兼て答申せられたる、ケブロン在意圖が加はつてゐることを忘るべきではない。而して、この育英啓蒙、農學の面目を一變して、新天地に被覆せしめんとする企圖の實現に當つて、創業經營の重任に當つたのは、實にクラルク (W. S. Clark) その人であつた。彼は、合衆國聯邦マサチューセツツ農學大學長の現任のまゝ、「一ケ年にて二ケ年分」の要務を遂行せんとする眞劍なる抱負を以て來朝し、實際の在任期は九年八月乃至翌十年三月迄僅々八ヶ月に過ぎざりしとは云へ、その偉大なる人格と、熱心なる劃策とは、強烈なる印象と成果とを永遠に烙印して止まざるものがあつた。感激に満ちた就任演説、含蓄多き別離の辭、若しくは「イエスを信するもの、契約」に見らるゝ感化力は、如何に彼が精神的にこの教育の殿堂を中心として、新開地の發達の上にオアシスタらしむることに成功したかは、餘りに著聞されたことである。然し、他の一面に彼は秀拔なる科學者であり、又學校經營者として知られて居た丈に、開拓の實際にも多くの論策を發表して、當局を啓發するところ頗る大であつたことをも同時に銘記すべきである。

彼の論策の第一として擧ぐべきものに、黒田長官の熱望に答申せる、北海道に對する米國移民の可否如何の問題がある。それは既に早くから、ケブロンによつて唱導せられ、爾來その實施について賛否まち／＼たるものがあつたのであるが、當局としては、當時の國論如何に係はらず今に至つて猶その實現を畫策する程、之を考慮してゐたのである。クラルクは、綿密なる策問を以て之に答へ、一、移民の歸化を必要とするか。二、政府は石狩河沿岸に集團せしめんとする移民に土地分與を許可すべきか。三、政府は移民に渡航費と家屋とを與ふるか。四、政府は或期間移民の兵役と租税とを免除し且つ自治的の一市區設立を許可するや。五、移民には日本帝國民と同一の權利を附與し、商・工・漁・鑛の諸業に従事せしむるや。斯る條件の下に、三十家族を移す爲に、總費用一萬弗を要すべく、彼等は造船造車家具農具の製造にも當るを得べしとし、彼等との接觸によつて、米國農業法の習練を誘導し職業上の能力を以て北海道の財貨を開くべきこと疑なきを以てし、恰も聯邦の昨今は不景氣なれば、移民を招致するに頗る好機會なる旨を告げて、その實現を切望してゐるのである。黒田長官は之に對して、政府に審議して可否を決定すべしとしてゐるが、遂にその實現を見なかつたのは、恐らく當時の情勢より見て國策上、かゝる餘りにも自由なる要求條件が容れられなかつたことと察せられる。

第二に、クラルクは開拓地の總體的觀察よりして主として日常生活機關の改變を極めて熱心に唱導してゐるものがある。これは、必ずしも彼の創意ではないにしても、當局者にとつては、更らに新し

き刺戟を加へることゝなつた。彼は、一般住民並びに屯田兵屋について餘りにも氣候を度外視して構營せられたるを指摘し須らく既設の建築方法を改め、居床を高くして寤庫を設け、暖爐の据付を勵行し、紙障子に代ふるに玻璃窓たるべきことを懇懇してゐる。更らに、絨製の衣服常用及び肉食の普及を擧げ、同緯度中各國國民の生活に比較して、當然の歸結としてその必要を論じてゐる。彼は、その後歸國して「日本の農業」と題する講演を試みたことがあるが、それには隨所同意味に於ける、全日本國民の生活様式の貧弱なることを述べてゐるものがある。<sup>①</sup>黒田長官が屢々告諭を發して衣食住の改變を奨勵せしめ後更に進んで、北海道と氣候を同じうせる魯領西比利亞及び樺太等に渡航して、暖爐家屋冬季交通用具等を移用するに至つた一つの動機に對して、クラルク等の意見が影響を與へなかつたとは云へない。彼は亦、諸外國の農業經濟の實際に於ける運用を示さんが爲め、札幌農學校に歸屬せる一農場を、全然外國農業教師の管理に委任せしめ、之を現術生徒によつて運用せしむべしとなし、或は九年十月江別屯田の爲めに、外國農具を撰定に及んでゐる。開拓使當局は、屯田様式の一の試みとしてクラルク及びドンをして農耕稼穡並びに兵屋を米國式に倣はしめんとして、この依囑となつたのである。彼は亦、開拓使の爲めに新に計畫せられたる、砂糖蘿蔔培養の實驗に當り、十ヶ條に互りて、氣候、土壤、勞力等、多くの看點より北海道最適の作爲たるを示し、歐米に於ける産出概況に論及して有望なる商品たるべきを教へたる論策があり、<sup>②</sup>やがてそれは、北海道第一次甜菜培養時代現出

の基因をなさしめてゐる。更らに、此種當面の施設について、或は山林保護案、或は水産製造物の販路等、恰もケブロン歸國の際のその如く、山積せる策問を與へられ、何れも該博なる答申に及べるところに、彼の存在が益偉大なるを知ることが出来る。

クラルクと共に、最初の農墾教職の任にあつた、ホウイレル、ベンハロー、ブルウクス、並びに、契約期限を延長在任せられたるドン及びポーマル等の一團は、何れも其専門に應じて、各卓越せる成績を擧げることが出来た。

土木に精通せるホウイレルは、札幌を中心とせる交通線路の實測を擔當し審らかに工程と豫算とを示したが、その意見としては、札幌より石狩河への運河開鑿案の不利なるを論定し、札幌新道についても、天賦の富を起すに足らずと斷じ、更に札幌・石狩河を連絡せんとする西海岸の鐵道敷設案を難じて、室蘭連絡を本據となすに如かずとし、小樽・室蘭の優劣觀に及び、七ヶ條に互つてその理由を述べてゐるが、之は、結局アンチセル・ワルフキールド・ケブロン、乃至バチエルダーのそれと歸趨を同じうするもので、當時猶小樽港の價値が充分に認識せらるゝ時期に達してゐなかつたことを示してゐるものがある。

但し、クラルクは、この點に對して全然相反對せる意見を示してゐるのは、當時識者の視界の上か

ら觀て興味なしとせない。彼は、札幌より札幌車道によつて室蘭への沿路の景觀を視察して生産能力なき火山灰集積地帯に失望し、同地方の將來恐らく容易に經濟上の見込なきを推測し、轉説して幌内より札幌を経て小樽に通ずる鐵道の必要を提案し、更らに、小樽より函館に直通せしめ、又樽函・東京間に汽船の交通を開いて、殖民及商業の繁盛を期すべしとし、現在北海天賦の富、重に西海岸に存するを以て専ら該地方港灣の修築に力むべきを説き、室蘭は背後地域狹隘なるを以て、その發達容易ならざるべしと結論してゐるのである。斯る兩様の見解はもとより簡單に是非を決することは出來難いとしても、やがて、札幌との連絡上小樽港の價值益々認めらるゝに及び、こゝに開拓當初の交通策案に、著しき轉回を來したのである。ホウイレルは、亦クラーク歸國後教頭の職にありて學政を統理し、北海道と本土との政治及貿易上の關係に着目して、特に經濟學の攻究を重用せしめた點に、指導者としてのすぐれたる立場を示してゐる。更に、舊日本の貧弱なる畜産界に與へたる、ダンの經營が、如何に卓越せる技量の下に面目を一新したるかは、我邦代表的の牧場として知られたる、新冠及び眞駒内が、主として彼によつて經營發達せられたることを以て知ることが出来る。

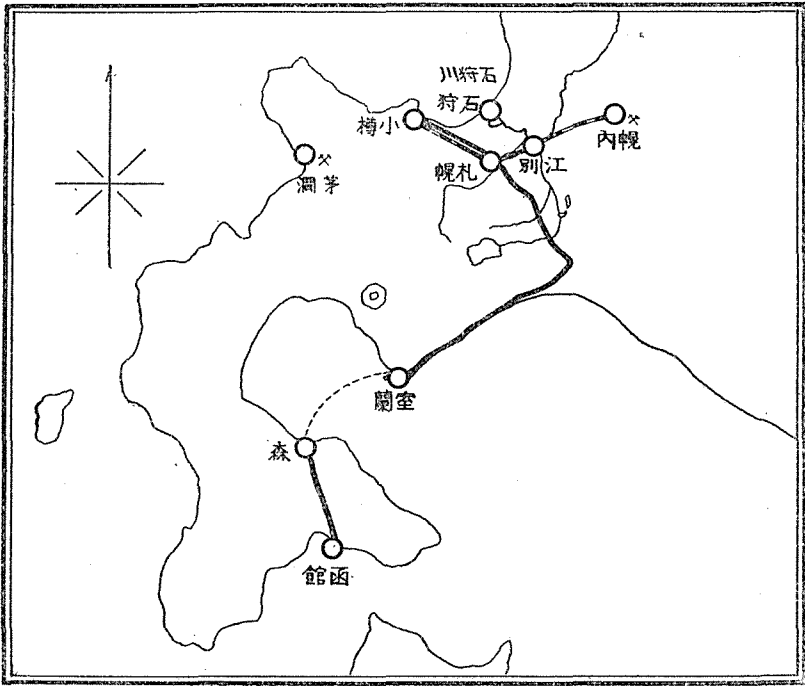
彼は亦、屯田に於ける新しき試みとして、江別の兵屋を米國式に準據し、稼穡の様式總べて洋風に則らしむる爲、前述の如く、クラルクと共にその經營に當らしめられたのであるが、兵員給與地の面積、耕程方法等に關して答申せる個條中、地積八エーカーにて一戸四人の家族を維持すべきやとの原案

に對しその可能を確言し、且家畜の飼養を慫慂した點にもすぐれたる創見がある。その後同屯田所在區域の濕地改良工事に當り、瓦筒埋没作業を以て排水に成功したのは所謂中部北海道泥炭地改良に先鞭を附したものととして永久に記憶せらるべきであらう。其他當時開拓使の新産業政策の現はれの一としての麥酒醸造に於けるベンハルロー、輸入植物、就中果樹の移植に關してのポーマル罐詰製造の主任技師としてのトリート等の功績は、亦特筆に値するものがある。

クラルクを遶つて農疊の教師團は心田を開發すると共に、斯る實際的拓殖經營に貢獻してゐるのは一面現術尊重を標語としたる北海道開拓過程の上に大なる光彩を與へたものとしなければならぬ。

次に私は、斯る農疊教師團の活躍と相前後して富源開發への工作が躍進し、久しき懸案の炭坑開發と、鐵道建設、港灣修築等の大土木工事が、拓計棹尾の成績となるに至つた經過を、檢査する順序となつた。

先に、農疊中心の多くの拓計施設がクラルク等によつて指導された如く、今採鑛土木の大仕事にありても、表面の首腦者たる山内堤雲、松本莊一郎等の統轄的技量は、勿論認むべきであるにしても、主任技師クロウフォールド(Joseph. n. Crawford)等の劃期的事業は開拓使招聘外人としての最後を飾るに充分であつた。クロウフォールドは十一年十月、到着ヨリ三ヶ年間、北海道炭山ニ連絡スル鐵道、並



本論文參照地圖

ニ輸車路建築師、並土木顧問としての契約の下に來朝し、同時に、ゴウンジョウは「到着ヨリ三ヶ年幌内煤田、茅渚煤田監督トシテ、且ツ右兩煤田ニ連絡スル輸車路建築ノ爲メニモカノ及ブ丈ケ助力」すべき條件の下に就任した。兩技師は、何れも合衆國聯邦出身であるが、別に、和蘭より庸聘したる水理工師フアングントの來道を求め、「三ヶ年、水理ノ職務ヲ、命ゼラレタル地方ニ在テ日本政府ニ奉職」すべき旨を以て、このブロックに加はらしめ、作業を共にすることゝなつた。

此時に際して、開拓使官吏山内・松本等、茅ノ渚・幌内兩炭坑、及石狩河巡歴の結果、別途交附金百五拾萬圓を要請し

て、煤田開採事務係の設置となり、そこに、彼等を迎へたのであつたが、クロウフォールドに係つた最も重大なる問題は、依然として「炭山<sup>○幌内</sup>を<sup>斥す</sup>に連絡せしむべき鐵道」の路線選定如何にあつた。彼は、綿密に關係地域踏査の結果、十二年七月答申書を當局に出したが、それは主として、石狩・小樽兩港の比較選定によるものであつた。當局としての、幌向より石狩河畔に搬出して、之を河口石狩港より積出の場合を假定し、それには沙洲の浚渫と築港の必要なきを檢案せしめ、小樽港の場合との得失を推究せしめたのであつたが、彼の考察するところによれば、種々の點より、石狩河による石炭搬出を不安なりとし、小樽の良港を選ぶに如かずとして、それは當然札幌の連絡ともなるべきを以て、首都の繁榮維持策としても、早く鐵道によつて貨物の集散を期せしめ、盛に工業を興すべしと論じ、具さに一石二鳥の利益を勸告した。彼は、更らにその翌月詳細なる鐵道布設案を草して當局に勸告し、先づ、手宮（小樽内）の良港たるは到底石狩の比にあらざるを斷言して、石狩河への搬出案を一蹴し、決定的に鐵道連絡を主張し、幌向より江別太に出で、札幌を經由して小樽に出づべしとし、建設技術上に於ける精案を論述した。この答申案によつて、當局の意向確定し、早く建設の計畫を竣つた幌向より幌内への線路を、江別に延長を決し、翌年更らに手宮（小樽内）より起工して、やがて札幌・江別に通じ、十五年に至つて完全に竣功を見たのである。これより先き彼は、久しく札幌・樽阻絶の天險として禍ひされた神威古潭を夷けて車道を開通し、又手宮の埠頭をも築造した。此等の殆ど神技を思



はしむる献心的努力は黒田長官をして彼の推薦者たる吉田駐米公使に心よりの謝辭を致さしめ、斯る成功を見るに至りし迄の拓計の波瀾多き過程を追想して、先縦者ケブロンケブロンの満足思ふべしと述懐したるものに、亦彼の満足をも察することが出来るのである。

而も、斯く云へばとてクロウフォールドは小樽内港灣の價値を劃期的に顯揚すると共に、從來識者の宿論となつてゐる室蘭の價値を認めなかつたのではなく、依然として内地向石炭積出港として函館と盛を競すべしとしてゐる。唯當面の問題として小樽内への鐵道連絡を先とし、續いて室蘭に及ばんとするにあつたとすべきである。室蘭への鐵道敷設順路として彼は、一は江別・札幌の中間より、石狩凹地帯に出づべきものと、他は、小樽・余市より、後志河流域を越えて、有珠湖の北岸に出で、紋別より室蘭に達すべきものとを擧げてゐる。彼は、更らにこの第二案の豫定線路を綿密に測量し、その結果を當局に報告してゐるが、それには、更らに岩内支線の豫定順路をも提示してゐるものがある。勿論それは、茅ノ澗炭山への連絡を目的とするものであつた。

然らば、採炭事業は如何に改良の目的を達したか。煤田監督としてのゴウンジョウは、當初主として茅ノ澗に趨いて、數回に亙る検査を重ねたる結果、輸車路の改良、石炭車の増設、將來採掘すべき曠脈の豫測等に關し、一々具體案を作製して當局に答申した。更に、鐵索による礦石輸送法あるを教へ、鑛夫としての囚徒使役が、歐米にあつては漸く行はれざるに至れる現状を述べて反省を促がした

りなどして、それは總てが採用せられなかつたにしても、或る程度の改革成つて、一時の盛業を顯揚することが出來た。

而も幌内にありては、ゴウンジョウの検査未だ充分ならざる中に、十三年三月病を獲るに及び、遂に奏功するに至らなかつたのである。更らにフアングントにあつては、當局招聘の要は主として石炭搬出の水路としての石狩河の水利及石狩の築港を計らしむるにあつたが、既にして、前述の如き小樽・石狩兩港比較の諮問となり、クロルフオールド等の提案によつて、小樽内連絡鐵道案容認せらるゝに及び、それとは切離して、専ら石狩河の水利を治めしむることとなり、十二年八月「石狩河及河口ニ關スル第一報告書」の提出となつた。但し、フアングントの工作は、當初の目的變更せられし爲め、豫想された如き功績を收むるに至らず、有珠・室蘭等の諸港に於ても當局の依囑により埠頭設計の検査に及んでゐるが、それとて、特記すべき程の功を立つるに至らなかつた。

以上は、大なる抱負を以て着手せられたる、拓計中の特別事業としての煤田開採について、如何に外人技師が干與せしかの點を累記したものであるが、之を公平の立場より觀て遂にその宣言せる如き豫望——兩炭坑の採掘が、異常の奏功を示す迄には行かなかつたにしても、幌内・小樽内連絡の、鐵道の敷設が緒に就いた、その成果を以てしても劃期的な一業績として認めらるべきであらう。副貳的な

効果は暫く措き、小樽内の港灣としての價值が、斯く迄顯揚せられたことは、これより後、北海道の發達の上に、どれだけの影響を與へたかは、所論を待つ迄もない。

但し、此工作計劃の發表せらるゝや、世論中には事の成效を期せず、例によつて疑惑の眼を瞠つて之を監視し、且つ手厳しき批難を加ふるものも亦尠くなかつた。その一例としての「ガゼット紙所載」論「開拓使」と題せるものは、<sup>④</sup>滔々數千言を費し、結論して「(開拓使ハ)今ヤ石炭開採ヲ辭柄トシ、若シ國財ヲ私スルニ非ズトセバ、先年ノ所行ニ準倣シ、更ニ競テ財貨浪費ノ諸理管轄ヲ始メンコトヲ企圖スルモノ、如シ、噫。」としてゐるものがあるが、當時未だ採炭更新事業の正に着手せられんとせる際のこととして、その結果より判斷したるものではなく、從來、開拓使諸成績の失敗を計上して、斯る批難を加へ、以て警告せんとしたものと察せられる。論旨を進めて石炭採掘に對する計畫と、クロウフォルド等其他の技術者の招聘については、その盛名よりしても、些の異議を示さざるも、本土及び近東の市場に懸絶して、未だ交通條件に恵まれざる北海道より、如何にして石炭を商品として搬出する具案ありやと反問し、提案して比較的近距离にある陸中釜石に鑛鐵所の設立實現を見るに至らば或は有望ならんと云ひ、其他の開拓使積年の施設失敗を攻撃せる個條を別とし、結局、この新計畫に對して從來開拓使の常套とせる放漫政策を不安としたのである。但し、斯る見解に於ける、北海道石炭の進出が當時の貿易上に於て如何なる位置に置かるゝかは、必ずしもガゼット紙の論ずるものに同意

さるべきではない。これは開拓使攻撃に餘りに急なる爲、その議論は、自己撞着に陥れる點が多々ある。當時、日本將來の富源を北海道に求め、爲めに大に資本を投下すべしと論じた少壯財界の具眼者、澁澤榮一の所謂富源は炭坑を指摘するものに外ならなかつた。<sup>⑤</sup>而して、斯る見解は、時代の輿論として迎へられ、その機運に乗じて開拓使の劃期的施設となつたとすべきである。

註① W. S. Clark:—The agriculture of Japan. Boston. 1879.

② 札幌農學第一年報所載報文「蘿蔔大根」

③ 明治十二年外國人文移錄五月二十日附山内事務長よりフアンゲント宛書簡による。クローフォードにも同文の諮問を發したりと推定せらる。

④ 明治十二年二月二十六日發行ガゼット新聞

⑤ 明治九年公文錄所收同年八月澁澤榮一より黒田清隆宛書簡

文中「小生之考にては將來御國之富殖を勉るは三陸以北に有之事にて北海道は或はその尤にも可有之やと考へ申候」と見ゆ。

#### 四、括言

開拓使の十年計畫は、明治十五年を以て、總計算の期限に到達した。而も、その事前に、二所謂官有物拂下問題」の勃發となり、やがてそれは中央政界の渦流に陥つて、その結末は、拾收すべからざる混亂を見た。私は、不幸にして先に老顧問ケブロン等によつて指摘された當局の放漫政策と、傳統的に禍ひせる官吏の腐敗、その他多くの不良條件が、局面に大なる陰影を與へたことを承認しなければ

ならぬことを悲む。その點に於て、餘りに辛辣なる外國系新聞の頻々たる批難攻撃論のあるものをも亦肯定せなければならぬ理由を持つ。

而も、國防と拓殖と二重の重任を負ふて、邦人として初めての舞臺に登場した當局の處置、——優越なる外人技師を招聘してその工作を進めた方針は、決してその結果より見て失敗だつたと云はれない。

開國維新と共に、一躍世界の日本となつて、列強と相伍する運命を有つた當時の邦國にありては、歐米に於ける諸般文物の發達があまりに強く炫惑するのを見た。政府各省、諸藩縣は、競て藝能の外人を迎へて、彼等に習得し、又盛に留學生を派遣して、異邦優秀の文物吸収に専念した。斯る方法は、從來とても其慣例があり、今に至つて猶諒らざるものがあるが、然し招聘外人の盛熾に至つては恐らくこの明治初期の所謂歐米文物心酔時代に超すものはないであらう。その點にあつては、開拓使の外人招聘も亦同一の範疇にあつた。唯、餘りにも新開地としての合衆國聯邦と景觀を同じうせる北海道に、彼等のプロックをして、その豊富なる經驗を以て或程度迄自由に拓殖計畫を施行せしめた點は單なる模倣心酔の結果にはならなかつた。而してそこには、彼等の工作が明白に投影されてゐるのを、觀取することが出来るところに興味があり、又その功非の分るところを知るのである。

今、斯る觀點に於て、極めて大局より、二三の結末を吟味するならば、第一ケブロン案の首都札幌

を基本とせる、有用の都市港灣炭田等に連絡する道路網の計畫は、後幾度かの補正を得て實現した。拓計の最後迄、存續否定の俎上に据ゑられなければならなかつた「官吏を養ふ爲め」の首都札幌は、遂に經濟都市としての存在をも獲得して發達することが出來た。

更らに、鑛山經營にありては、外人技師等の衆口一致直に民間經營に移換すべしとの論旨を、當局の容るゝところとならず斯の幌内炭坑等にありても、幾度かの變轉の後、道廳時代に至りて漸く民業に委せられたのであつたが、結果より見て、それは決して當局の利得するところとはならなかつたのである。

七重・札幌の官園——それは札幌農覺新式農業の模範場となり、そこに養成せられたる現衛生の地方農場への進出は、西洋農具と移入果樹蔬穀の培養と共に、更らに牧畜の盛行を併せて、内地農業のそれを遙かに超躍して、彼等の素志を遂行せしむることが出來た。

ケブロンとクラルクとによつて、殊に熱心に唱導された衣食住の變革案は、卒先して黒田長官の熱心なる主張となり、極力その實行を慫慂せられ、それは、多くの影響を植民生活に寄與することゝなつた。但し、一面耕作不可能の理由を以て抑制せられた米作は、日本國民としての宿命的執着の下に漸次耕作に成功し、遂に彼等の判断を裏切つて早く生産自給の域に到達した。

更に、彼等は獨り技術上の問題に於てのみ、契約條項を履行したのではなかつた。所謂心田の開發

に深甚なる感化を與へたクラルクの偉業は、今更縷言すべきでないが、ケブロンにしても、彼は札幌在留中、松本判官等に對して、殖民統御の上に宗教の鼓吹を要すとし、精神上に於ても、彼等はかゝる警告を忘れなかつたことに對して感謝の辭を捧ぐべき理由がある。

斯く論じて來る時に、私は、拓殖當面の最も重要な根本問題が、この時期の間遂に實施の運びに至らなかつたことを、こゝに書きつけねばならぬ順序に到達したことを遺憾とせざるを得ない。

それは、既に幾度か接觸した問題——即ち、殖民地選定と區劃制度との實施である。ケブロンはもとよりそれを、開拓に於ける當然必須の施設として、早く聯邦に慣行せらるゝ諸制度を細叙して應用すべきものなりとし、その準備行爲として全島の三角測量を急がしめたのであつたが、既説の如く、測量そのものは、彼の歸國後中絶し、區劃制度は遂に行はるゝことなくして止んだ。斯の如くして、一政商バチエルダーさへも、例へ勸奨の動機に於て自ら異なるものゝ、黒田長官に拓計の請負を乞へる具體案の一は、石狩平原を主とする區劃地設定とその分賣とであつた。其程迄に、當時として區劃制の未着手は開拓地としての缺點たるが、あまりにも明瞭に知られたのである。斯の如くして、一面營々として、種々の方策の下に實施せられつゝあつた拓地殖民の計畫は、決してその努力を無視すべきではなかつたが、結局は、殖民地選定と區劃制の實施に於て、始めて、大規模にして且統制的なる

拓殖が可能たることを知らしめたのである。されば、斯る合理的なる新法が實施せられざる間は、到底多數の移住民があつたにしても、之を定着せしむることは困難だつたと考へられるのである。當時創始せられたる屯田の目的の一は、彼等を軍律に束縛して強て定着せしめ、以て隨從移住民を招致するの具となさしむるにあつたと云はれるのにも、當時に於ける移民の實際が、甚しき困難の事情に置かれたるを知らしめる。開拓使は、老顧問の切言あるに係らず、實にこの點に於て拓殖の最大眼目を逸したのは、甚しき失敗であつたに相違ない。前記ガゼット紙上の「論開拓使」に、「退テ政府ノ當初北海道費金定額ヲ設クル所以ヲ顧慮スルニ、其目的、或ハ一大眼目タルヤ、則チ殖民移住ノ外ニ出テザルナリ。然レドモ、結局、此目的ヲ以テ今日ニ得タル成果ハ、秋臺モ功ヲ奏スル所ナシ。」と痛罵せるもの、決して、理由なしとせないものである。開拓使當局は、何が故に、この重要問題を疎外したかは其原因那邊にありや解するに苦むところであるが、恐らくそれは、官商營利の常套手段を執つて、力を炭坑經營、漁業資金貸與等に集中し、斯の、測量事業の如き基礎的施設を中止して、遂に斯る結果となつたものでないかとも推測される。斯くの如して、殖民地選定事業の創定は、遙かに遅れて十年となり、二十二年漸く道内の大原野を概査終了し、同年殖民地區劃の開始となつたのである。

開拓使を廢して、北海全道を分縣制度とすべき政府案は、既に早く決定された如くであつたが、既



にして、その實現は、政務の不統一到底その持續を許さず、再び全道を合一して、北海道廳の設定となつたのであるが、一面時勢の進展に伴ふ我國文化の發達は、北海道としても最早開拓使の終期を劃して、爾來殆ど外人開拓指導者としての庸聘を要としなかつた。従つて、此等外人の工作は、新しき北海道への生誕に際して多くの試鍊を要した開拓使時代に、殆どその全部を盡したとすべきである。

然るに、開拓使廢止後三縣時代、即ち明治十六七年代の前後は全日本農民の恐慌時代であり、又士族救済に於ける、授産問題の盛に論唱された時代でもあつた。此等の全日本的の社會問題を解決せんが爲めの一方策として、北海道移住論が時論として盛んに官民の間に唱道されたのは、當然のこと、すべきである。而して、この間に於て、政府は、泰西著名の農政學者を招聘してその意見を徴してゐるが、彼等は、日本農家更生の對策を立案すると共に、それは政府當局の諮問によることと云はれるが、期せずして對北海道論策を示して、所見を明らかにしてゐるものがある。私は今、簡單に其等の論旨を抄約して、この一編の括言を補ふことゝしたい。

獨逸の政治博士ペ・マイエット (P. Magel) の農業保險論 (一名日本農民位置改良策) に收録されたる北海道殖民論、并びに北海銀行論は、何れも明治十六年の起草であるが、彼は、北海道の人口二百萬に達せざる中は (同年の北海道在住全人口は約二十五萬八千人)、完全なる政治的版圖にあらずとして、之を促進せんが爲めに、普國の制度に倣つて日本の人口一萬に付五人の青年を土着せしめ、連帶責任

を有する村邑を營ましめ、殖民銀行と保險法の創設によつて經濟的の安全を期せしめ、又我が大化改新の創定に於ける令制口分田に倣ひて、之に倍する土地を頒ち、殖民銀行法を利用して小作を脱して彼等に地主たるを期せしむべしと論じてゐる。保險法、銀行法の適用に、専門學者としての異色を示すと共に、強國家主義的色彩の濃厚なる一面を顯揚してゐる。特に、我が古代法の班田を適用せんとすの試案を提出してゐるのは興味がある。

次に、明治二十年に起草せられたる、農學博士マックス・フェスカ(Max Fesca)の日本農業及北海道殖民論<sup>②</sup>にありては、其所説頗る多岐に亙つてゐるが、第一移住民に附與するに、一戸分十町歩の土地と資本とを貸與し、洋式農法と農具の使用を必要とし、又一定時期の間外國農夫を移して模範たらしむるを勧め、更らに北海道に於て、第一漁業、第二農業、第三鑛業を振作すべしとの政府の意見は謬れり、須らく、食料自給の立場より、農業第一たらざるべからずとしてゐる。フェスカは、更らに幌内、室蘭連絡鐵道線の速成を必要とし、囚徒の移植を必ずしも是認せず、屯田兵の稼殖の小規模に過ぎたるを遺憾とし、更に米作否定論に及んでゐる。之は、フェスカが農學者であるだけに、北海道の振興を策するに農業第一主義を以てし、洋式農法即ち大農法を盛にすべしとの論旨で、從來屢々ケボン等によつて唱導されたところを強張したものである。

之を要するに、兩者とも、その専門の立場より所論もとより相合致するものではないが、共に、北

北海道に對する殖民は、何よりも先づ、農民としての土着にあるべきを力説し、斯の開拓使時代の工作に現はれたる、餘りにも一時に着手せんとしたる各種多岐に互れる企業の發動を寧ろ抑制してゐるのである。それは、一面彼等の立論の要旨が當面の問題として、内地の窮民移植に限定された點にも係つてゐる。私は、この選抽された二論策に現はれたる成案が必ずしも當時の日本並びにその殖民地としての北海道の社會的發展の情勢を充分に認識して立てられたとは思はれない點がないとは云へぬと考へる。而も、著しき混亂試験狀態に置かれた開拓使時代の展開が、こゝに至つて、漸次次の階段に移つて行く爲めに、之を拾收せんが爲めに、斯る穩便可全なる指針を附與したものとしてみる時に、そこに重要な意義を認めざるを得ない。彼等の所論は、勿論日本の農業及び農民恐慌に對する應急案であつたにしてもそれは明治二十年後情勢轉換の際に至つて猶その論旨は揚棄さるゝに至らなかつたのである。(昭和九年十二月札幌にて)

註① 明治二十三年發行「農業保險論一名、日本農民位置改良策」後編第一篇過當ノ抵當トナリタル土地ヲ公賣處分ニ付スルコト并ニ北海道殖民論の條及び土地抵當銀行稅附北海道銀行論の條

② 明治二十一年四月外務省發行「日本農業及北海道殖民論譯文」

〔追記〕 本論稿は、その題目に示す如く、先きに發表したる「ホラシ・ケブロンと北海道開拓策」〔歴史と地理第三十卷第四・五號所載〕と其の内容を同じうせる點あり。而して、引用史料その他について相互小異あるものは、本論稿にあるものを以て是正せんとするものなり。